

目次 序文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西嶋, 義憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/16833

— 金沢大学経済学部研究叢書 15 —

西 嶋 義 憲 著

カフカと通常性

— 作品内対話における日常的言語相互行為の「歪み」 —

金沢大学経済学部

目 次

序文

第一部 対話のテキスト言語学的分析

第1章 *Die Bäume* (『木々』) のテキスト言語学的構造分析 —テキストの多層性について—

0. はじめに	1
1. 問題の所在	1
2. <i>Die Bäume</i> のテキスト言語学的分析	3
2.1. テキストの構造	3
2.2. 意味論レベル	5
2.3. 言語相互行為レベル	7
2.4. 構造記述	7
3. テキスト理解のための基礎	8
3.1. 解釈の試み	8
3.1.1. 意味論レベルにおける対立	8
3.1.2. 言語相互行為レベルにおけるテキストのダイナミズム	10
3.2. 文献学的調査	10
4. „Baumstämme im Schnee“に関する 4つの見解とその批判的検討	12
4.1. 4つの見解	12
4.1.1. „Baumstämme“ の矛盾的解釈	13
4.1.2. 丸太としての „Baumstämme“	14
4.1.3. 立木の一部としての „Baumstämme“	14
4.1.4. 丸太あるいは立木の一部としての „Baumstämme“	15
4.2. 意味論レベルか言語相互行為レベルか	15

5. 結語：作品全体の理解をめざして	15
[補論] 解釈と翻訳 —カフカのテキスト <i>Die Bäume</i> の日本語訳をめぐる—	
0. はじめに	27
1. 分析の試み	27
1.1. 分析の焦点と枠組み	27
1.2. 仮説設定	28
2. 日本語訳例	31
2.1. 訳文と解釈	31
2.1.1. „Baumstämme im Schnee“ と „[...] liegen sie glatt auf“	32
2.1.2. „[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden“ と「根」	33
2.2. 不自然な訳語	33
2.2.1. „glatt“	34
2.2.2. „aber sieh“	35
2.3. 仮説①の評価	35
3. <i>Beschreibung eines Kampfes</i> の日本語訳	36
3.1. 異同の確認	36
3.2. 日本語訳例	37
3.2.1. [A-TYPE：翻訳]：2例	37
3.2.2. [C-TYPE：専門文献]：1例	38
3.3. <i>Die Bäume</i> との比較 —仮説②の評価—	38
4. 解釈・翻訳・翻訳文体論	38
5. 結語	39
[資料編]	43

第2章 カフカ作品における対話の「歪み」

—*Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析—

0. はじめに	49
1. カフカ作品の対話の特徴	49
1.1. 先行研究の問題点	49
1.2. 対話と形式的協調	50
1.3. カフカ作品の対話における結束性	51
1.4. テキスト例 <i>Die Bäume</i>	52
2. 「歪み」の構造のテキスト言語学的分析	54
2.1. <i>Von den Gleichnissen</i> の全体的分析	54
2.2. 意味論レベルの構造	56
2.3. 相互行為レベル	57
3. 結語： <i>Von den Gleichnissen</i> の対話における「歪み」の技法	57

第3章 カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* に おける対話の分析 —繰り返しの技法—

0. はじめに	61
1. 対話と「歪み」	61
1.1. カフカ作品における対話	61
1.2. 「歪み」の構造	62
1.3. テキスト理解の難しさ	63
2. <i>Kinder auf der Landstraße</i> のテキスト分析	63
2.1. テキストの提示	63
2.2. 意味論レベルの分析	64
2.3. テキスト内言語相互行為レベルの分析	65
2.4. 基本構造としての「歪み」	66
3. テキストの特徴	66
3.1. 同一言語行為の繰り返し	66
3.2. テーマ転換	68
4. 結語	69

第4章 カフカ作品における次元の転換

—カフカの断片 *Der Brunnen* を例にして—

0. はじめに	75
1. テキスト言語学的対話分析のために	75
2. ある「断片」の分析	76
2.1. テキストの提示	76
2.2. テキスト言語学的作品分析	77
2.3. テキスト <i>Der Brunnen</i> の構造	79
3. 技法	82
3.1. 基本的な技法	82
3.1.1. コンテキスト情報の欠如	82
3.1.2. 疑問提示による対話進行	82
3.1.3. 結束性の不均衡	82
3.1.4. 異なる次元間の移動	83
4. 結語	84

第5章 カフカの「奇妙な」対話 —「お見通し」発言の機能—

0. はじめに	89
1. 対話の構造と「お見通し」発言	89
1.1. カフカ作品の対話	89
1.2. カフカの作品 <i>Das Urteil</i> について	92
1.3. 次元の異なる二人	94
1.4. 「お見通し」発言の機能の仮説	95
2. 作品分析	96
2.1. ある断片テキストの分析	96
2.2. 思考表現語彙と行為主体	98
2.3. 展開の技法	100
3. 結語：「お見通し」発言の意味	101

第6章 カフカのテキスト *Auf der Galerie* の構造分析 —日常的非現実話法構文との対比から—

0. はじめに	105
1. 問題の所在	105
2. テキスト構造分析	106
2.1. 二つの複合文の異同	106
2.2. 記号化	110
3. 二度の否定による円環構造： <i>Die Bäume</i> との類似性？	111
4. 日常的な非現実話法構文との対比	113
4.1. 日常的な非現実話法構文との違い	113
4.2. 理由内容の拡張	114
4.3. 否定的願望の提示	116
5. 結語：テキストの「歪み」と技法	117

第二部 起点言語と目標言語における通常性の比較

第7章 「へりくだり」と „Demut“ の比較

—カフカのテキスト『変身』を例にして—

0. はじめに	123
1. 違和感を覚える表現「へり下って」	123
2. 「へりくだり」と „Demut“	125
2.1. 「へりくだり」と訳されるドイツ語表現	125
2.2. 事例1と2における „demütig“ と „Demut“ の意味	127
2.3. 「へりくだり」と „Demut“ の違い	127
2.4. 「へりくだり」と „Demut“ の共通点	128
3. コミュニケーション行動の翻訳にかかわる問題点	129
3.1. 事例1 („demütig“) の訳文比較	129
3.2. 事例2 („Demut“) の訳文比較	131
4. 結語	133

第8章 „bereuen“ と「恥ずかしく思う」

—コミュニケーション行動の捉え方の違い—

0. はじめに	137
1. 訳語の違和感	137
1.1. 違和感を覚える訳語「恥ずかしい」	137
1.2. 「恥ずかしい」とその原語	138
1.3. 「誤訳」か?	139
2. 翻訳における情報の加除	140
2.1. 情報の加除	140
2.2. 敬語表現	141
2.3. 社会言語学的情報	142
2.4. 翻訳における対応表現	143
2.4.1. 両言語に対応表現あり	143
2.4.2. 削除	144
2.4.3. 付加	144
2.4.4. 両言語に対応表現なし	145
3. 「恥ずかしく思う」と „bereuen“ の意味の違い	145
3.1. 「恥ずかしい」の意味	145
3.2. „bereuen“ の意味	146
4. 事例の解釈	147
4.1. 事例1の解釈	147
4.2. 事例2の解釈	148
4.3. 言語行動の理解の違い	149
5. 結語	150

第三部 異文化間コミュニケーションと通常性

第9章 伝達動詞の日独対照の試み

—小説およびその翻訳を利用して—

0. はじめに	157
1. 問題設定	157

2. 研究方法	159
2.1. 調査の枠組み	159
2.2. 翻訳を利用する際の問題点と使用テキスト	161
2.3. 調査対象としての伝達動詞	162
3. 結果	164
3.1. 伝達動詞の出現状況	164
3.2. 伝達動詞の使用率	164
3.3. 伝達動詞の種類	165
3.4. 伝達動詞の情報量の違い	166
3.5. 遂行動詞の使用率	167
3.6. 相互行為構成動詞の使用率	167
3.7. 談話構成説明動詞の使用率	168
4. 考察	168
4.1. 量の側面	168
4.2. 質の量	170
5. 結語：2つの伝達動詞と翻訳文の読みやすさ	171

第10章 常用句を利用したコミュニケーション行動の 日独比較

0. はじめに	175
1. 問題設定	175
1.1. 印象の違い	175
1.2. 問題点	176
2. 機能上等価な表現の分析	177
2.1. 使用範囲の差	177
2.2. 大学のオフィスアワー	177
2.3. 比較	178
2.4. 視点の違い	179
2.5. 共感の有無	180
3. 形式的・機能的に等価な常用句の比較	181

3.1. 発現形態の似た常用句	181
3.2. 視点とその移動	184
4. コミュニケーション行動評価概念と「共感」	185
4.1. 基本的なコミュニケーション行動評価概念	185
4.2. 「おもいやりのある」と „rücksichtsvoll“	185
5. 結語：印象の違いの説明	188
終章 「歪み」と通常性	193
あとがき	197

序 文

0.1. 日常コミュニケーションにおける通常性

日常的なコミュニケーションにおいて、話者は、自分の行動に疑問を抱いたり、相手の行動に違和感を覚えることはまれである。多くの場合、対話相手と文化的・社会的背景を共有しているからである。ところが、文化的・社会的背景の異なる話者が自分の対話相手となった場合には、相手の行動が奇妙に思えたり、自分自身の行動が相手にうまく理解されていないと感じたりする事態が頻繁に生じる。これは、自分では「当たり前だ」と思っているコミュニケーション行動が、「当たり前だ」と感じられなくなっていることに原因がある。すなわち、この場合、コミュニケーションにおいて自分が想定し、それに基づいて行動している規範 (Norm) が通用しなくなり、通常性 (Normalität) が確保しにくくなっているのである。

一般に、コミュニケーション行動において、人は相手も自分と同じ行動ルールや原則あるいは習慣にしたがって振舞うものと想定している (Reinelt 1983)。この想定は、コミュニケーション参与者全員が共有していると期待されるもので、規範と呼ばれる。したがって、コミュニケーションが円滑に進行している限りにおいて、この想定が疑問視されることはない。すなわち、自分が想定している規範は、相手が同様の規範に基づいて行動している限り、気づきにくいということだ。そのような状態を通常性が確保されているという。ところが、すでに述べたように、文化的・社会的背景の異なる者どうしがコミュニケーションを行なう場合、それぞれが、自分の文化・社会に通用している規範を前提としながら行動しがちである。そこに、規範の違いによる「ずれ」の生じる余地がある。その結果、それぞれがその場で想定する通常性にズレを感じることになる。このようなズレは、異文化間コミュニケーションの際、しばしば経験されるものである (Marui 1996)。

通常性が期待どおりに確保されていないと感じられるのは、何も異文化間コミュニケーションに限られるわけではない。そのような場面で顕著に生じることなので、単に気づきやすいということに過ぎない。当然のことながら、同じ文化的背景を共有している話者どうしでも起きる。日常的なコミュニケ

ーションにおいて、自分が当たり前と考えていることは相手も同様に考えているに違いないと想定しているが、そこに何らかのズレがありさえすれば、どのような場合にも生じるものなのである。

また、そのようなズレを意図的に作り出すことも可能である。読者の期待を意図的に破るために、ある種の技法を凝らした文学テキストがあるが、それがその例である。たとえば、フランツ・カフカ(Franz Kafka, 1883-1924)は、そのドイツ語作品において作中人物間のコミュニケーションの流れに関する読者による予測や期待をわずかにずらすことによって、奇妙な世界を創出することに成功している。そこで、そのような誤解や奇妙なやり取りとして特徴づけられることのあるカフカのテキストを分析することにより、逆に、ドイツ語社会で「当たり前」とされる、習慣化・自動化しているコミュニケーションに関わる通常性の一部を明らかにできるはずである。

0.2. カフカ作品における「歪み」のある対話

一般に、カフカは、奇妙な物語を書く作家として知られている。その代表的な作品として、短編では『変身』(*Die Verwandlung*)や長編なら『城』(*Das Schloss*)を挙げることができるだろう。前者は、主人公が巨大な害虫(*ungeheueres Ungeziefer*)に変身してしまう物語である。後者は、主人公が「城」の中心部にたどりつこうといろいろ試みるがかなわない話だ。このような作品で描かれる世界や事態が日常的な経験を超えているのである。カフカの作品で提示される事態が奇妙なものであることが多いので、そのような奇妙さを表わす表現として「カフカの」(*kafkaesk*)という形容詞が存在するほどである。それほど、この作家の作品と奇妙さは密接に結びついているのである。

この奇妙さを含めて、文学研究においてこれまでさまざまな作品解釈が提出されてきた。その多様な解釈について、たとえば有村(1985)は、宗教的・神学的解釈、心理学的・深層心理学的解釈、マルクス主義的・社会批判的解釈、実存主義的解釈、存在論的解釈、言語芸術作品としての解釈、伝記的資料に基づく解釈、受容美学的解釈というように、その研究史を区分した上で、その多様性を許す要因は作品構造自体に備わっていると述べている(vgl.

井上 1999)。では、カフカ作品に見られる、その多様な解釈を許す構造とは、言語学的にはどのようなものとして分析されるのだろうか。

残念ながら、言語学的に十分説得力のある作品構造の分析は、これまでのところ、私の知る限り皆無といっている。解釈の基礎となっている分析は、多くの場合、主観的な解釈が出発点としてあり、それに適合するように言語分析が恣意的になされているにすぎない。その意味で、言語学的な検証に耐えられる分析はない (vgl. 富山 1997, 木下 2000)。そこで、筆者は試しに、多様な解釈が提出されてきた小品 *Die Bäume* (『木々』) を題材に、その言語構造それ自体を、言語学的手法を用いて分析してみた。その結果、日常的な言語行動、すなわち習慣化し自動化した相互行為 (やりとり) からのズレがその基本構造にあることがわかった。そのズレが、当該作品にある種の「歪み」を与え、多様な解釈を許していたのである。

ところで、一般に、われわれの言語行動は、すでに述べたように、習慣化され、自動化している。したがって、習慣化され、通常性 (当たり前性) が確保された、ある種の言語行動連鎖は、自動的に特定の意味と結びつく。その関連はあまりに当たり前過ぎて気づきにくい。ところが、カフカの作品では、そのような習慣化・自動化された思考を逆手に取っているように見える。形式的には通常言語相互行為のように見せかけ、そこにある種の「ずらし」を巧みに忍び込ませることで、奇妙な「歪み」のある意味世界の創出に成功しているように思われる。カフカ作品の「歪み」のある対話を分析することは、逆に、日常的な対話の通常性に光をあて、何が日常的コミュニケーション上の通常性を構成しているのかを知る手立てとなりうる。1989年以降、私はこのような発想にもとづき、カフカ作品の対話を分析し、その成果を論文として公表してきた。本書は、そのような論考を中心にまとめたものである。

0.3. 本書の構成

上記のように、本書に収められている論考は、これまで筆者がとくにカフカ関係で執筆してきたものが中心となっている。それを単に羅列するのではなく、3つのテーマに分けて配列してみた。したがって、本書は三部からなる。

第一部の主要テーマは、カフカ作品の対話における「歪み」を構成する技法の分析である。第1章から第6章まで、それぞれ異なる6つの小品を対象に、個々のテキストが、日常的な言語使用にある特定の技法を施すことにより、奇妙な世界を描き出していることを明らかにする。第二部では、カフカ作品のオリジナルとその翻訳を比較し、違和感を覚える訳語に焦点をあてる。その際、ある言語の言語行動の背景にある通常性は翻訳を通して別の言語に適切に移されうるのか、という観点から考察する。それによって、翻訳では、日本語社会において通用しているコミュニケーション行動原則が干渉してカフカの描く世界が適切に伝えられず、逆に誤解を引き起こす可能性があることを指摘する。第三部では、カフカから離れて、コミュニケーション行動一般における通常性という問題を、引用動詞と常用句の使用条件の日独比較によって考察する。

*

各章は、以下に掲げてある初出論文が基礎となっている。本来独立して発表してきた論考なので、どの章から読み始めても理解に困難はないだろう。なお、初出論文は、本書に収録するにあたって、すべてに加筆したことを付記しておく。とくに、第1章は、3つの論文をもとに、全面的に書き直したものである。

初出一覧

[第一部]

第1章：「カフカの *Die Bäume* の構造分析の試み —テキスト言語学の視点から—」.

In：『広島ドイツ文学』（広島独文学会）第4号，1989，29-48.

「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために —テキストの多層性について—」. In：『かいろす』（「かいろす」の会）第28号，1990，31-44.

„Zum Verstehen von Franz Kafkas Stück *Die Bäume* —Ein textlinguistischer Ansatz zur Vielschichtigkeit des Stücks—“. In：『金沢大学文学部論集言語・文学篇』第20号，2000，175-195.

補論：「解釈・翻訳・翻訳文体論？ —カフカのテキスト *Die Bäume* の日本語訳をめぐって—」. In：『広島ドイツ文学』（広島独文学会）第8号，1994，45-61.

第2章：「カフカ作品における対話の『歪み』 —*Von den Gleichnissen* のテキスト言

語学的分析—]. In: 『ドイツ文学論集』(日本独文学会中国四国支部)第33号, 2000, 5-14.

第3章: 「カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析 —繰り返しの技法—]. In: 『言語文化論叢』(金沢大学言語教育研究センター)第5号, 2001, 161-174.

第4章: 「カフカ作品における次元の転換 —カフカのある『断片』を例にして—]. In: 『金沢大学文学部論集言語・文学篇』第21号, 2001, 81-93.

第5章: »Durchschauende Äußerung im Werk Kafkas«. In: 『文体論研究』(日本文体論学会)第51号, 2005 (印刷中).

第6章: 「カフカのテキスト *Auf der Galerie* の構造分析]. In: 『言語文化論叢』(金沢大学言語教育研究センター)第9号, 2005 (印刷中).

[第二部]

第7章: 「『へりくだり』と»Demut«の比較 —カフカのテキスト『変身』を例にして—]. In: 『ドイツ文学論集』(日本独文学会中国四国支部)第36号, 2003, 61-71.

第8章: 「»bereuen« は『恥ずかしく思う』か?]. In: 『金沢大学経済学部論集』第25巻第1号, 2004, 127-144.

[第三部]

第9章: 「伝達動詞の日独対照の試み —小説およびその翻訳を利用して—]. In: 『文体論研究』(日本文体論学会)第46号, 2000, 42-60.

第10章: 「»Was kann ich für Sie tun?“は『偉そう』か? —常用句を利用したコミュニケーション行動の比較—]. In: 『かいろす』(「かいろす」の会)第41号, 2003, 19-36.

参考文献

—有村隆広: 『カフカとその文学』第二版, 郁文堂, 1988.

—井上勉: 「カフカ受容史・研究史と新たな研究方向]. In: 『徳島文理大学文学論叢』第16号, 1999, 65-102.

—木下直也: 「カフカ再読のための試論(2) —否定性・外部・パースペクティヴ— *Die Bäume* を中心に]. In: 『経済研究』(成城大学経済学会)第148号, 2000, 65-81.

—Marui, I.: »Zusammenstoß der Normalitäten interaktiver Kooperation im Japanischen und Deutschen«. In: 『ドイツ文学論集』(日本独文学会中国四国支部)第29号, 1996, 58-67.

—富山典彦: 「日本におけるカフカ研究についての一考察 —日本独文学会文献情報(BGJ)を利用して—]. In: 『成城文藝』(成城大学文芸学部)第157号, 1997, 37-59.

-Reinelt, R. : „JAKOP und WEKOP —eine Begegnung—“ In : 『愛媛大学教
養部紀要』第16号, 1983, 215-241.